

<オンライン教学講座「撰時抄」① 参考資料>

◎勝利の経典「御書」に学ぶ

本抄の冒頭で、仏法を学ぼうと思うのであれば、必ず最初に「時」を習わなければならないと断言されています。ここで大聖人は、「必ず」「まず」と、「時」を習うことは仏法者の必須の要件であることを強調しておられます。

本抄で言われている「時」とは、端的に言えば、「法を説く時」とであると拝されます。(中略)

もちろん大聖人も、衆生の機根を軽視していたわけではありません。御消息文の諸御抄にも明らかなように、一人一人の門下の機根の状況によって、こまやかな配慮をなされています。

しかしそれ以上に、一切衆生の救済のためには、人々がどのような機根であれ、いかなる迫害があろうとも、徹して正法を語り抜かなければならない「時」が末法である。この一点を大聖人は深く知悉^{ちしつ}なされていたがゆえに、「時」を最優先に重視され、本抄で徹底して「時」を論じておられるのです。

(「大白蓮華」2010年4月号44ページ)

◎勝利の経典「御書」に学ぶ

「時」とは、待つものではなく、つくるものだ、と、若き日の苦境の中で、私は恩師から教わりました。

「時」とは、自らの意志と努力で勝ち取るものだ。自らが決めて戦うことに帰着する。^ざ坐して瞑想にふけるよりも、祈って、動いて、書いて、話して、人々の心の扉を開き、心に崩れぬ平和と幸福の砦^{とりで}を構築しゆかん。この信念で私は一貫して行動してきたつもりです。そしてまた、これが、私たちの「撰時」——時^{せんじ}を撰^{えら}ぶ実践だと確信します。

(「大白蓮華」2010年4月号53ページ)